

「ヒアシンスの床」

森 道 子

Comus の終りで、天へ帰る守護の天使が、キリスト教の天国と異教の the Garden of Hesperus や Elysian Fields とのイメージを重ね合わせて述べるエピローグに、次のような一節がある。

Beds of hyacinth, and roses,
Where young Adonis oft reposes.
Waxing well of his deep wound
In slumber soft, and on the ground
Sadly sits the Assyrian queen ;
(*Comus*, 997-1001)

Venus と Adonis の伝説は古代ギリシアの牧歌詩人達に愛されたテーマであった。Bion も Moschus も Adonis の血からバラの花が咲き、Venus の涙から windflower (アネモネ) が咲いたと歌っているが¹、バラの寝床やヒアシンスの床の言及は見当らない。Bion の歌う Adonis の寝床は次のようである。

Lay him down in the soft coverlets wherein he used to slumber, upon
that couch of solid gold whereon he used to pass the nights in sacred sleep
with thee; ...²

Milton の愛したローマの詩人 Ovid の伝える物語では、野猪の牙に倒れた Adonis の血から、ざくろの色に似た血の色の花アネモネが咲いたとなっている。

Within an hour, a flower sprang up, the colour of blood, and in appearance like that of the pomegranate, ... anemone.³

ここにはヒアシンスはおろか、バラさえ言及されていない。

Ovid の中世、ルネサンスヨーロッパにおける人気によって、イギリスのルネサンス時代にも、Venus と Adonis の伝説はもてはやされた。それは *Faerie Queene* の第三巻 Chastity の巻の “the operative symbol” となり、Marlowe の *Hero and Leander* 風⁴の官能的な悲恋物語詩である *Venus and Adonis* を世に送った。Shakespeare の詩感を唆したのは、死と復活のアレゴリーではなく、また Hyacinthus との運命の類似でもな

「ヒアシンスの床」

く、ニンフ Salmacis の Hermaphroditus への蠱惑的な執拗な片想いと⁵の共通点であった。恋の熟練者 Venus と、その求愛を拒絶する美少年 Adonis との絵巻が繰り広げられている。全篇を司る色彩は、Ovid の Salmacis と Hermaphroditus の物語をも特徴づける、バラの赤と百合の白である。Venus の花である赤いバラは、Adonis の若々しい肢体とエネルギーをも象徴している。しかし Adonis の死後咲くのは、バラではなく、血の色 purple の花である⁶。

Miltonの尊敬してやまなかった先輩詩人Spenserの*Faerie Queene*第三巻に the Garden of Adonis の描写があるが、Milton の Paradise の形成に影響を与えたものとしてよく知られている⁷。復活した Adonis の横たわる “a pleasant arbour”⁸ は次のとおりである。

There wont faire Venus often to enjoy
Her deare Adonis joyous company,
And reape sweet pleasure of the wanton boy ;
There yet, some say, in secret he does ly,
Lappéd in flowres and pretious spycery,
By her hid from the world, and from the skill
Of Stygian Gods, which doe her love envy ;
But she her selfe, when ever that she will,
Possesseth him, and of his sweetnesse takes her fill.

There now he liveth in eternall blis,
Joying his goddessse, and of her enjoyed :⁹

その場所は myrtle の樹々で囲まれた、太陽神も風神も不可侵の木蔭であって、周囲には至る所、昔の伝説にある恋人達の転じた花々が咲いている。

And all about grew every sort of flowre,
To which sad lovers were transformd of yore ;
Fresh Hyacinthus, Phoebus paramoure,
And dearest love,
Foolish Narcisse, that likes the watry shore,
Sad Amaranthus, made a flowre but late,
Sad Amaranthus, in whose purple gore
Me seemes I see Amintas⁷ wretched fate,
To whom sweet Poets verse hath given endlesse date.¹⁰

Hyacinthus はその筆頭にあげられており、Amaranthus も血の中に咲いている。しかしバラは見当たらない。

Hyacinthus の物語は Ovid の *Metamorphoses* 第十巻で、Orpheus が豎琴に合わせて語り歌う。Adonis の物語も同様である。Orpheus は Milton の愛した伝説的異教の歌

「ヒアシンスの床」

人で、初期の詩から *Lycidas, Paradise Lost* に亙って登場する。Milton はこの歌人の語る、花に変わった二人の美少年のイメージを数度重ね合わせて用いている。Apollo の寵を受けて、円盤投げに興じている最中に、円盤が当って時ならぬ死を遂げ、血の色 purple の花に変わる Hyacinthus と、Venus に愛されて、野猪の牙の犠牲となり、やはり血の色の花に転じる Adonis とは酷似した運命にあり、若き詩人の想像力を刺激したにちがいない。Cambridge に籍をおいて一年後のラテン詩 *Elegia Prima* に、すでにこの二つの伝説の組み合わせが見られる。

Pellacesque genas, ad quas hyacinthina sordet

Purpura, et ipsa tui floris, Adoni, rubor.

(and enticing cheeks beside which the flush of the hyacinth, and even the blushing red of your flower, Adonis, seems dull.)

(*Elegia Prima*, 61, 62)

二つの花の色を強調していて、Hyacinthus のは purple, Adonis のは赤と区別している。この詩より数ヶ月前に作られた ‘On the Death of A Fair Infant’ は、姉の独りっ子の夭折を悲しんだもので、愛らしく美しい花のイメージが全篇を貫いている。その中で Hyacinthus の短命とその花の色が描かれている。

Yet art thou not inglorious in thy fate;

For so Apollo, with unweeting hand

Whilom did slay his dearly-loved mate

Young Hyacinth born on Eurotas' strand

Young Hyacinth the pride of Spartan land;

But then transformed him to a purple flower

Alack that so to change thee winter had no power.

(‘On the Death of A Fair Infant’, IV)

Lycidas の弔問に来る Cam 河の精である老 Camus のかぶっている帽子には、ヒアシンスの花に Apollo が刻んだ悲嘆の文字 AI AI と似たものが記されている。“that sanguine flower inscribed with woe” (*Lycidas*, 106) とやはり血の色が印象的である。Adonis のイメージはうすれ、わずかに “as killing as the canker to the rose” (*Lycidas*, 45) と Adonis 伝説とは異った脈絡での病めるバラが、彼の姿を偲ばせるにすぎない。*Lycidas* は、それまでの若き日の詩作から、新しい分野への決意を示す Milton の詩人経歴の一大転機となった作品である。同じ志をもち、洋々たる将来を属目されていた青年の死は、Milton 自身の未来の野望を牽引するものであった。長年月をかけて貯え準備してきた、現世での第一級の詩人となる野心を、精神的来世的レベルのものに昇華しなければならなかった。

「ヒアシンスの床」

二年後のラテン語で書かれた哀悼詩 *Epitaphium Damonis* も、親友 Charles Diodati の死と復活を語っている。ヒアシンスはここでは薬草として登場する。

...tua gramina, succos,
Helleborumque, humilesque crocos, foliumque hyacinthi,
Quasquet habet ista palus herbas, ...
(healing potions and herbs—hellebore, humble crocus, hyacinth leaf—all
the plants of the fenland)
(*Epitaphium Damonis*, 150-2)

そして未婚のまま死んだ友人の純潔を “*purpureus pudor* (purple modesty)” と Ovid の言葉を借用して表現している。

二つの挽歌から Adonis のイメージが消えているのは、Adonis には常に Venus という愛欲と美の女神の官能的でなまめかしいイメージがつきまとうからであろう。Edward King も Charles Diodati も Milton 同様、女性には潔癖で、女遊びも結婚も経験しないまま、若くして世を去った。同じ美少年の死と転身という伝説であっても、Hyacinthus と Apollo の愛はスポーツマンとしての男性間の友情の色濃く、King と Diodati の死により適切であった。その上、Ovid は purple という色を Hyacinthus にのみ適用している。purple という色は、Milton が王の色、神の色、天国の色として好んで用いるものである。それは同時に、傷から流れる血の色であって、十字架上で流されたキリストの贖罪の血を連想させずにはおかない。ところで古代ギリシアでは、Adonis の復活は自然界の再生を象徴する春の祭典であった。この点では、むしろ Adonis が、万物の蘇える春に祝うキリストの復活祭イースターと共通性を持つ。しかし、chastity, temperance をひととき重要視した Milton は、Venus にまつわる Adonis のエピソードをそのままキリスト教的なものに適用するのをためらっているようすがうかがわれる。Adonis にふれる時は必ずと言えるほど、Hyacinthus と結びつけているが、Hyacinthus の方は単独で取り上げている。Adonis 伝説を重用した Spenser, Shakespeare を含めるルネサンスの詩人達に、Milton はひそかに抵抗し挑戦しているかのようである。

以上の詩を含む初期の作品には、古代伝説の花々のみならず、イギリスの野に日常目にふれる色とりどりの花が頻出する。Shakespeare にも頻繁に姿を見せる primrose, daisy, pansy, pink, daffodil, cowslip, violet, muskrose, woodbine, honeysuckle 等々である。特によく知られているのは、Lycidas の棺に撒かれる、悲しみを秘めた花々である。花の比喩やイメージは多く、自らの詩人としての経歴の未熟さをかこつ有名なソネット第七番にも、遅咲きの花としての自分の才能を歌っている¹¹。

後期の作品では、ヒアシンスの名は *Paradise Lost* のエデンの庭で、二度登場している。最初は墮落以前の Adam と Eve の神聖な結婚の寝所 “their blissful bower” (IV,

690)の床に、象眼細工のように咲いている花々の一つとしてである。次は、墮落直後の二人の墮落した欲望の場である、禁断の木の近くの“a shady bank”(IX, 1037)に咲き乱れている。

この二つの場面について、C.S. Lewis は次のような意見を述べている。

This is why Milton places a scene of sexual indulgence immediately after the Fall (IX, 1017-45). He doubtless intended a contrast between this and the pictures of unfallen sexual activity in IV and VII (500-20). But he has made the unfallen already so voluptuous and kept the fallen still so poetical that the contrast is not so sharp as it ought to have been.¹²

もちろん墮落前後の Adam と Eve の関係や態度の相違、墮落の引き起した変化は注意深く描かれている。“hand in hand”(IV, 689)であった二人の同意した姿は、“Her hand he seized”(IX, 1037)と Adam の攻勢となり、Eve も“Yielded with coy submission, modest pride,/And sweet reluctant amorous delay”(IV, 310,311)であったのが“Carnal desire inflaming, he on Eve/Began to cast lascivious eyes, she him/As wantonly repaid; in lust they burn:”(IX, 1013-15)と変り、二人は“wearied with their amorous play”(IX, 1045)となる。

そして Eve の美に比較される古典神話の最初の女 Pandora の美は、夫に悲劇的運命をもたらす無邪気な媚態を暗示している。しかし purple の翼をつけて、黄金の矢をつがえ、不夜の灯をかざす愛の神の見護る下で眠る Adam と Eve には、“bought smile/Of harlots”(IV, 765,766)も“court amours”(IV, 767)も無縁の、貞潔な“wedded love”(IV, 750)あるのみであった。それが墮落後には、Dalilah の誘惑に負け、その奸計に陥って、徳も力も失い、その“harlot-lap”(IX, 1060)から目覚める Samson の比喩に変わる。“Herculean”という形容辞は、単に Samson の強力無双ぶりだけでなく、妻の裏切りによって死に至る恐ろしい運命をも暗示している。希望を残す Pandora の物語に対して、血と死によって以外贖うことのできない惨劇である。

しかし墮落以前のエデンにおける無辜の愛は処女の清純さそのままの誘惑と危険を孕んでいる。Adam と Eve の寝所を表現する“their blissful bower”という句は、*Faerie Queene* 第二巻の妖しい誘惑に満ちた“the Bower of Bliss”¹³を連想させる。temperance の象徴である騎士 Guyon の陥らなかった誘惑に陥って、Adam は罪を犯してしまう。temperance は Spenser も Milton も高く評価した徳であった。これは後に *Paradise Regained* 第二巻の宴会の場面で、Arthur 王の騎士達が受けた誘惑や、出会った美女達を列挙して(P.R., II, 354-61)、キリストの難攻不落の temperance を讃える箇所¹⁴に照応することになる。temperance の欠如は Adam の罪の主要部分で、キリストの贖いの構成

「ヒアシンスの床」

要素とならねばならなかった。また Spenser の the Bower of Bliss の描写の一節は、*Paradise Lost* の美しく名高いくだりに投影されている。

More sweet and wholesome, then the pleasaunt hill
Of Rhodope, on which the Nimphe, that bore
A gyaunt babe, her selfe for griefe did kill ;
Or the Thessalian Tempe, where of yore
Faire Daphne Phoebus hart with love did gore ;
Or Ida, where the Gods loved to repaire,
When ever they their heavenly bowres forlore,
Or sweet Parnasse, the haunt of Muses faire ;
Or Eden selfe, if ought with Eden mote compaire. ¹⁴

Not that fair field
Of Enna, where Proserpine gathering flowers
Her self a fairer flower by gloomy Dis
Was gathered, which cost Ceres all that pain
To seek her through the world ; nor that sweet grove
Of Daphne by Orontes, and the inspired
Castalian spring might with this Paradise
Of Eden strive ; nor that Nyseian isle
Girt with the river Triton, where old Cham,
Whom Gentiles Ammon call and Libyan Jove,
Hid Amalthea and her florid son
Young Bacchus from his stepdame Rhea's eye ;
(IV, 268-79)

今、この墮落以前の bower と以後の bank の情景を、花々に限って考察してみると、非常に多くの共通点があって、一読しただけでは同一場所かと思間違ふばかりである。もちろん同じエデンの庭であり、同じ花の咲いているのは当然であろうが、二人の寝所は神が特に用意した、牧神 Pan も森の神 Silvanus もニンフも足を踏み入れることを許されない、神聖な場所である。ここに登場する花々は主に古典の伝統的な花々、異教であろうとも天上に咲くものである。従ってたとえ愛欲的で官能的な印象が免れないにしても、¹⁵Jupiter が Hera を抱く divine earth に咲く “crocus, and hyacinth” は墮落以前の花の中に数えあげられる。この時、バラもそのたわわに花をつけた頭をもたげて、すっと立ち、壁とも天井ともなって、Adam と Eve の床に花を撒き散らしている。

Thus talking hand in hand alone they passed
On to their blissful bower ; it was a place
Chosen by the sovereign planter, when he framed
All things to man's delightful use ; the roof

「ヒアシンスの床」

Of thickest covert was inwoven shade
Laurel and myrtle, and what higher grew
Of firm and fragrant leaf; on either side
Acanthus, and each odorous bushy shrub
Fenced up the verdant wall; each beauteous flower,
Iris all hues, roses, and jessamine
Reared high their flourished heads between, and
wrought
Mosaic; underfoot the violet,
Crocus, and hyacinth with rich inlay
Broidered the ground, more coloured than with stone
Of costliest emblem: other creature here
Beast, bird, insect, or worm durst enter none;
Such was their awe of man. In shady bower
More sacred and sequestered, though but feigned,
Pan or Silvanus never slept, nor nymph,
Nor Faunus haunted. Here in close recess
With flowers, garlands, and sweet-smelling herbs
Espoused Eve decked first her nuptial bed,...

(IV, 689-710)

こうして墮落以前の Adam と Eve は、*Comus* の Adonis のように、ヒアシンスとバラの床に眠る。そしてやがて Adonis のように、野猪の牙のような Satan の魔手に倒れることになる。しかし Venus の哀憐の情にかわるキリストの慈愛により復活し、不滅の生を約束される。Hyacinthus の場合は Apollo が Venus の立場に代るが、そうなれば太陽はそのままキリストのイメージである。この点でも Hyacinthus の伝説は Adonis 物語より、Milton の要求に一層適切に応えるのである。

この violet, crocus, hyacinth を全て青い花と注をつけた批評家がある¹⁶。すみれは Shakespeare の “blue-veined”¹⁷ や *L'Allegro* の “on beds of violets blue” (*L'Allegro*, 21) 等から不思議ではないが、象眼細工のように咲く花々をみな同色とは納得いかない。Milton が *Comus* で “violet-embroidered” (*Comus*, 233) という時、“violet-crowned” と形容されるアテネの北西の郊外 Colonus を思い浮べていたと言われる¹⁸。その Colonus こそ Sophocles が “a wreath with the crocus' golden hue”¹⁹ と讃えた故郷である。*Samson Agonistes* の主要な範と仰いだ悲劇 *Oedipus at Colonus* の周知のくだりを Milton が見逃す筈はない。近代ではヒアシンスは bluebell と同属の青い花を指すことも多い。しかし *Iliad* からそっくりそのまま引用されたも同然の “crocus, and hyacinth” では古代ギリシアの purple の花以外に想像するのは無理であろう。Adam と Eve の床となるこの三種の花 violet, crocus, hyacinth の色は、blue, gold, purple であって、神に遣わされて Adam と Eve を訪れ、天地創造、天上の戦いを語り聞かせる大天使

「ヒアシンスの床」

Raphael の三対の翼の色に相当する。肩から伸びる第一対目の翼は purple で、腰をとり巻く第二対目は gold, 踵から生えて足を囲むのは blue と語られる。

six wings he wore, to shade
His lineaments divine; the pair that clad
Each shoulder broad, came mantling o'er his breast
With regal ornament; the middle pair
Girt like a starry zone his waist, and round
Skirted his loins and thighs with downy gold
And colours dipped in heaven; the third his feet
Shadowed from either heel with feathered mail
Sky-tinctured grain.

(V, 277-85)

Milton は天上のものを表現する時、ヨハネの黙示録に記される白と金とを基調とし、空の色青を加え、purple を強調する。神の栄光を讃美する天使達の頭を飾るのは不滅の花 amaranthus と黄金である。amaranthus はもとエデンの生命の木の側に咲いていたが、人間の墮落後直ちに天に移されて、他の地には決して咲かない purple の花である。

Their crowns inwove with amarant and gold,
Immortal amarant, a flower which once
In Paradise, fast by the tree of life
Began to bloom, but soon for man's offence
To heaven removed where first it grew, there grows,
And flowers aloft shading the fount of life,

(III, 352-57)

また “celestial rose” も purple である (III, 364)。さらに、人間の歴史を Adam にパノラマとして展開して見せる大天使 Michael も purple の vest を着けている (XI, 241) purple は王の色であり、血の色である。

墮落直後の bank のしとねにも、すみれとヒアシンスとは咲いている。花の中で大きな変化はバラである。Milton はここでバラに重要な役割を与えている。Venus の花であり、Adonis の化身とされるバラは、墮落の原因となる Eve のアレゴリーのようである。Adam から無鉄砲にも独立して、庭の花の世話に出かけた Eve は、バラの花畑で、myrtle の枝で花に支えをしているところを Satan に襲われる。

Beyond his hope, Eve separate he spies,
Veiled in a cloud of fragrance, where she stood,
Half spied, so thick the roses bushing round
About her glowed, oft stooping to support

「ヒアシンスの床」

Each flower of slender stalk, whose head though gay
Carnation, purple, azure, or specked with gold,
Hung drooping unsustained, them she upstays
Gently with myrtle band, mindless the while,
Her self, though fairest unsupported flower,
From her best prop so far, and storm so nigh.

(IX, 424-33)

バラの花の中の “fairest unsupported flower” (IX, 432) である Eve は当然バラであり
Faerie Queene 第二巻の the Bower of Bliss で “a bed of Roses” に横たわる妖女の²⁰
恋人が歌う “Virgin Rose” を思い浮かべさせる。²¹

“Ah see, who so faire thing doest faine to see,
In springing flowre the image of thy day ;
Ah see the Virgin Rose, how sweetly shee
Doth first peepe forth with bashfull modestee,
That fairer seemes, the lesse ye see her may ;
Lo see soone after, how more bold and free
Her baréd bosome she doth broad display ;
Loe see soone after, how she fades, and falles away.

“So passeth, in the passing of a day,
Of mortall life the leafe, the bud, the flowre,
Ne more doth flourish after first decay,
That earst was sought to decke both bed and bowre,
Of many a Ladie, and many a Paramowre :
Gather therefore the Rose, whilest yet is prime,
For soone comes age, that will her pride deflowre :
Gather the Rose of love, whilest yet is time,
Whilest loving thou mayst lovéd be with equall crime.”²²

Horace 他ラテン詩人達の影響でルネサンスを風靡したテーマ *carpe diem* の変奏であり、
Spenser は Tasso の *Gerusalemme Liberata* 第十六巻に負うところが多い。

The gently-budding rose (quoth she) behold,
The first scant peeping forth with virgin beams,
Half ope, half shut, her beauties doth up-fold
In their dear leaves, and less seen fairer seems,
And after spreads them forth more broad and bold,
Then languisheth and dies in last extremes :
For seems the same that decked bed and bow'r
Of many a lady late and paramour :

「ヒアシンスの床」

So in the passing of a day doth pass
The bud and blossom of the life of man,
Nor e'er doth flourish more, but like the grass
Cut down, becometh withered, pale, and wan ;
O gather then the rose while time thou has,
Short is the day, done when it scant began ;
Gather the rose of love while yet thou mayst,
Loving be lov'd, embracing be embrac'd.— 23

Milton は古代ローマ、イタリア、イギリスのどの詩人達とも異なる独自の技巧で、このテーマを駆使し、摘まれる危険の迫るバラの花に、Eve の墮落を象徴しているのである。

Eve が Satan に会う場所の直喩も深い意味を持っている。Adonis への言及は、Comus における感覚的イメージとは異なり、復活後の不滅の至福を、圧縮した “revived” という言葉の中にこめている。また、たとえ恋の戯れを歌うものであっても、ソロモンの雅歌は神と人間との間に交される愛の象徴である。以上のような庭々に優るエデンの庭で起る事件は、過去の庭々の暗示する愛よりも高遇でなければならない。そこで Eve の犯す罪が、後に fortunate fall となるであろうことは容易に推測できる。

Spot more delicious than those gardens feigned
Or of revived Adonis, or renowned
Alcinous, host of old Laertes' son,
Or that, not mystic, where the sapient king
Held dalliance with his fair Egyptian spouse.

(III, 352-57)

しかしバラは Eve が禁断を犯した時、Adam の腕から色褪せて地に落ちる。

From his slack hand the garland wreathed for Eve
Down dropped, and all the faded roses shed :

(IX, 892, 893)

こうして墮落直後の Adam と Eve の愛の場に、バラは姿を見せないのである。同じ purple の花 amaranthus もエデンの庭から消えてしまったにもかかわらず、ヒアシンスは依然として purple の床を、墮落した Adam と Eve に提供したのであろうか？

墮落直後に Adam と Eve の戯れる “a shady bank” は、*Winter's Tale* で Perdita²⁴ が恋人 Florizel に言う言葉 “a bank for love to lie and play on” を想起させ、彼女の数えあげる花々、あるいは狂気の Ophelia の差し出す花々など、イギリスの野辺を飾る花々に思いを馳せさせられる。Lycidas の棺に撒いた花々も浮んでくる。

「ヒアシンスの床」

So said he, and forbore not glance or toy
Of amorous intent, well understood
Of Eve, whose eye darted contagious fire.
Her hand he seized, and to a shady bank,
Thick overhead with verdant roof embowered
He led her nothing loth; flowers were the couch,
Pansies, and violets, and asphodel,
And hyacinth, earth's freshest softest lap.
There they their fill of love and love's disport
Took largely, of their mutual guilt the seal,
The solace of their sin, till dewy sleep
Oppressed them, wearied with their amorous play.

(IX, 1034-45)

墮落以前は天上的であった情景が、墮落後には少し地上的となり、古代神話の世界に近代イギリスの野を垣間見る心地である。

Paradise Lost における花のイメージは並はずれて美しいものの、総称的な言及が目立ち、*Comus*, *Lycidas* 等初期の詩に見られたイギリスの野に咲く個々の花の名が述べられることは殆んどない。天国と地獄と楽園との物語であることもその一つの理由であろうが、Milton の視力が失われたことも大いに関係があろう。しかしイギリスの春の野の喜びの記憶は、Milton の胸から消え去ったのではない。Eve に出会った Satan の新鮮な感動を託した直喩など、ここかしこに吐露されている。このように考えると、墮落直後の花の寝台のヒアシンスの色を、野辺に咲く野性のヒアシンス *crowtoe* の色と同じ青と考えても、あながち Milton の叱責を受けることもあるまい。

注

1. Bion, "The Lament for Adonis", 64-67, in *The Greek Bucolic Poets* (Loeb Classical Library), trans. J. M. Edmonds (London, 1960), p. 391 "The Paphian weeps and Adonis bleeds, drop for drop and the blood and tears become flowers upon the ground. Of the blood comes the rose, and of the tears the windflower."
2. Moschus, 'The Lament for Bion' 5, 6, in *The Greek Bucolic poets*, p. 445. "Pray roses, now be your redness sorrow, and your sorow, windflowers;"
3. Bion, 'The Lament for Adonis'. 72-74.
4. Ovid, *Metamorphoses* (Penguin Classics), trans. M. M. Innes (Harmondsworth, 1979) p. 245.
5. *Faerie Queene* III, i, 7 in *Edmund Spenser's Poetry* (A Norton Critical Edition), ed. Hugh MacLean (New York, 1968), p. 205.
6. Ovid, *Metamorphoses*, p. 102.
7. *Venus and Adonis*, 1167-70, in *The Complete Pelican Shakespeare* (New York, 1975) p. 1418.

"And in his blood, that on the ground lay spilled,/A purple flower sprung up, check' red
with white,/Resembling well his pale cheeks and the blood/Which in round drops upon their

「ヒアシンスの床」

whiteness stood.”

7. *Faerie Queene*, III, vi, 39-50.
8. *Ibid.*, III, vi, 44.
9. *Ibid.*, III, vi, 46, 48.
10. *Ibid.*, III, vi, 45.
11. ‘Sonnet VII’, 3, 4.
“My hasting days fly on with full career,/But my late spring no bud or blossom sheweth.”
12. C. S. Lewis, *A Preface to Paradise Lost* (Oxford, 1961), p. 70.
13. *Faerie Queene*, II, xii, 42 ff.
14. *Ibid.*, 52.
15. Homer, *The Iliad II* xiv, 348 (Loeb Classical Library), trans. A. T. Murray (London, 1967), p. 93.
16. J. Milton, *Paradise Lost: Books III-IV*, ed Lois Potter & J. Broadbent (Cambridge U. P., 1976), p. 103 “all three floor flowers are blue, the color of peace, prudence.”
17. *Venus and Adonis*, 125.
18. *Milton: Lycidas and Comus* (Macmillan’s English Classics), Notes by W. Bell (London, 1958), p. 62.
19. *Sophocles I* (Loeb Classical Library), trans. F. Storr (London, 1962), p. 215.
20. *Faerie Oueene*, II, xii, 77.
21. *Ibid.*, II, xii, 74.
22. *Ibid.*, II, xii, 74, 75.
23. Torquato Tasso, *Jerusalem Delivered*, trans. E. Fairfax (New York), p. 321 (XVI, 14, 15).
24. *The Winter’s Tale*, IV, iv, 130 in *The Complete Pelican Shakespeare*, p. 1355.

Milton の詩は全て, *The Poems of John Milton* (Longman Annotated English Poets) ed. J. Carey and A. Fowler (London, 1980) による。